

4. 「教員のニーズと教員養成カリキュラム」座談会記録

2003年3月8日（土）午前10時～12時

東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター・共同研究員室

出席者：

[アンケート回答者]

- A（埼玉県α市・教育委員会勤務） B（埼玉県β市・公立中学校勤務）
C（埼玉県γ市・公立小学校勤務） D（埼玉県δ市・公立小学校勤務）

[東京学芸大学教官]

荒尾禎秀（教務・学生担当副学長）
高城 忠（教員養成カリキュラム開発研究センター長）
池田延行・池田義人・岩田康之・金子真理子・腰越滋・佐久間亜紀・筒石賢昭・
富江英俊・三石初雄・湯浅佳子（以上、プロジェクトメンバー〔五十音順〕）

[開会]

総合司会（岩田康之） 本日は、私ども東京学芸大学の学長裁量経費で行っておりますプロジェクト「教員養成カリキュラムの基本構想に関する研究」の座談会にお越しいただきまして、ありがとうございます。私は本日、総合司会を務めさせていただきます東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センターの岩田でございます。よろしくお願ひします。

本日の座談会の企画は、本学の中の研究プロジェクトの中で、教員養成系大学のカリキュラムの中に、現職の先生方がお考えになっていることを、どう取り込んで活かしていったらよいかということが課題として浮かび上がり、その流れで企画されたものです。

昨年、埼玉県内の小・中学校の先生方約 2,000 名にアンケートをお願いしました。その結果についての詳しい報告は、後ほど調査分析班からあるかと思ひます。そのアンケートの中で、できれば回答者の方々に座談会を企画したいという趣旨で、差し支えなければご連絡先などをお書きいただきたい、と申し添えました、それに応じていただいた方に呼びかけをしまして、本日4名の方にお集まりをいただいた次第でございます。年度末の非常に忙しい時期ということで、来たくても来られないという方々が結構いらっしゃったようです。それらの先生方からのメッセージも別にまとめて用意してありますので、あとで参考にしていただければと思ひます。

本日のプログラムですが、お手元のプログラムにあります順序で行っていききたいと思ひます。

[ごあいさつ]

総合司会 初めに、本センターのセンター長から、皆様にごあいさつをお願いいたします。

東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター長（高城） 本センターのセンター長を仰せつかっております高城と申します。本日は、年度末のお忙しいところをご出席いただきましてどうもありがとうございました。

今、総合司会の岩田から説明がありましたけれども、今年のちょうど今ごろ、お忙しい時期に「教員の生活と教育課題に関する意識調査」というアンケートをお願いしたわけでありまして。このアンケートはやや答えにくい回答形式だったこともあったのでしょうか、必ずしも、たくさんの方からご回答をいただいたわけではありませんが、アンケートの中に、別途、先生方のお考えをうかがう機会を設けたいと考えておりますので、ご協力いただける方は連絡先をご記入下さいとアナウンスさせていただきました。42名の方が連絡先を記入して下さいましたので、座談会をご案内させていただいたということです。最終的には、4人の先生方にご出席いただけるということで、本日、座談会を開かせていただいたというわけでございます。

大学からのアンケート調査のお願いも多いかと思われませんが、我々としては、すぐに実現できるかどうかはわかりませんが、アンケート調査の結果を真摯に受けとめ、できるだけ、先生方のご意見・ご希望を、教員養成のカリキュラムや現職の先生方の研修プログラムの中に取り入れて参りたいと考えております。本日は、アンケート調査用紙だけでは、十分には語りつくせなかったところを、忌憚なくお話いただきたいと考えております。ざっくばらんにお話をさせていただいて、できるだけ本音をお聞かせいただければと考えております。

本日は、後ほどご本人にご紹介いただきますけれども、本学の教務・学生等担当副学長の荒尾先生にご出席をいただいております。現職の先生方のニーズを伺って、大学の方にそれをお伝えするという役目も私にはございますので、荒尾先生にご出席をいただいで、先生方のご意見を聞いていただこうとお願いいたしました。

本日は、朝早くからありがとうございました。どうぞ、よろしくお願いたします。

〔参加者自己紹介〕

総合司会 それでは、この後、アンケート結果の紹介とディスカッションに入るわけですが、あまり堅苦しくなくざっくばらんにお話をいただけたらと思います。

まず、お集まりいただいた方々に、勤務校の状況なども含めて、簡単に自己紹介をお願いします。

A 皆さん、おはようございます。今、α市教育委員会で学務の方を担当しております。昨年たまたま学校の方に居残りしましたのでこのアンケートに答えさせていただきました。今度は学務で教員を配置するという立場で、なおさら興味が湧いてまいりまして、それで今日参加いたしました。

私は、今、人事異動が終わりましてその後欠員補助ということで、主に臨時的な任用の教員の配置を手がけています。今現在、初任者というのは、学校に入ってすぐ初任研があつて1年間できるわけですがけれども、臨任者というのは、大学を出てすぐ採用されると何の研修もなしに学校の方に配置されるという問題があります。

α市では2人大学を出てすぐの欠員補助を雇うんですが、その方々には現役の先生方についていただいて、事前に研修をもつように考えているんですが、そこへつながら何か手がかりがあればと思ひまして参加させていただきました。よろしくお願いたします。

B β市のX中におりますBと申します。私は、10年近く教務主任をしていまして、教務で3校目になるんです。教務主任というと学校の研修とかかかわりが深いので、今日はいろいろなお話

が聞けるかと楽しみにしてまいりました。

教務主任の仕事の中で、教育実習生と触れ合う機会が多いんですけれども、昨今の教育実習生の意識の中に、本当に中学校の現場で子どもたちと一緒に汗を流して、部活をやったりとか、学級指導をしっかりとやろうという意識を余り感じられないんです。優秀な学生が多く、勉強はできるんだけれども、どうもどろどろしたところに入っていけない子たちが多いような気がしています。

去年も、埼玉大学の学生だったんですけれども、群馬の方の大変優秀な子だったんですが、保健室を尋ねてきて、「実は中学校の教育実習をしたくなかったんだ」と、そういうことを養護教諭に相談をするという学生がいました。聞いたところによると、小学校の採用試験には受かっているということで、できるんだろうけれども、現場の中で、教員との人間関係はもちろんですけれども、子どもたちともうまくいかないのではないかと。こんな状況を去年見たばかりだったので、大学の方にも実態をお話できればと思ってまいりました。

私も、1年目臨時の経験があります。そのころは、大学でやっていたことをストレートにぶつけても若さで何とかカバーできた時代だったんですが、あれから二十数年たちまして、さっき言ったように、今、現場の学生が実習に来てほとんど通用しないという厳しい状況があると思います。

私論ですが、大学4年生は、1年間学校で実習してから採用というか、インターンというくらいの気持ちでやらないと、今の現場の厳しい中学校では、大学を出たばかりで1年間の初任研ぐらいでは太刀打ちできないのではないかとというのが、現場の素直な観点だと思います。よろしくをお願いします。

C Y市のY小学校に勤務しておりますCと申します。よろしくお願いします。

私は、ほかの県で小学校の教員を何年かやっておりましたが、退職しまして10年ほど家庭におりました。その後、埼玉県で臨時補充をいろいろな形態で勤めております。本年度は、今までは常勤だったんですけれども、1年間初任者対応の非常勤ということで、先ほどのA先生のお話を関心深く聞きました。まさにその中の勤務をさせていただきまして、昨日、勤務をとりあえず終了したというところで、今日は参加できました。普段でしたら、やはり先ほどのお話の中にもありましたように、この時期にというのは、やはり現場の先生は引いてしまうのではないかと思っています。

学校をたくさん回っておりまして、つい何日か前もY市の教育長さんとお話をしたんです。それは来年度からの勤務についてということで、直談判に行つてまいりました。「Cさん、来てほしいんだけれども、倍雇えるんだよね。常勤の場合には給与体系が年齢、経験とともに上がっていくものですから、それでピンチヒッターのときばかりお願いして申しわけない」と。6年生の3学期とか、セクハラに遭ってすぐ辞めた若い女の先生の後とか、その時に明日からでも来てほしいと。そういうお話——ばかりとは言いませんけれども——をお受けすることが何度かありました。

初めのうちは、こんなことでは自分の身がもたないから、正直辞めてしまおうか、来年度どうしようか、今度の話はどうしようか、そんなことを考えながら何年間は勤めておりました。今は、ピンチの時に立つ人なんだということで、逆にその意味でのプロフェッショナルという意識を持っています。

来年度は初任者対応がいろいろと勤務形態が変わるといふうに聞いていまして、教育長さんにも、本年度と同じ形態ではないんですけれども、何かの形で必ずやりたいというそこだけ、自

分の言いたいことだけは言ってきました。変化球が多くて参考になるかどうかわからないんですが、私のような立場の者もいてもいいかなと思いました。何十人もいらっしやると思ったので、ドキドキして参りました。よろしくお願いいたします。

D δ市立Z小学校から参りましたDと申します。よろしくお願いいたします。

パラパラとめぐりまして、今日は、こんなことを感じました。まず、先生方は車が80%から90%ということで、私、これはちょっとした問題だなと思いながら拝見させていただいたんです。と申しますのは、私も車で勤務しているんですけども、今日、武蔵野線の電車にしばらくぶりで1時間近く乗ってまいりましたら、雪の山がとてもきれいで、富士山も見えまして、こういう環境を教師も子どもも見ながら学習していったら、とてもすばらしい教育ができるんじゃないかと思いながら電車でまいりました。

私、初任者2人を今年度指導をしております、そんなことも絡めながら、外の景色を見て来たんですけども、初任者も、こういう景色を見ながら子どもたちと接して授業をやってもらえたらうれしいなと思いながら、生意気なようですけれども、ここに参加させていただきました。

悲しいのは、新しい学生を養成するから協力してくれというのに、たった4人しか教員が集まれないということは、やはり悲しかったです。いかなる忙しさがありましても、そんなことよりも次期、私たちの後輩を育てるので知恵を貸してくれとおっしゃっている大学がお願いしているのですから。たった2,000人のアンケートで、今日来たのが4人であるということがとても私は悲しかったのです。

忙しさと申しますと、今の父兄の方もよくそんなことをおっしゃって、参観日にいらっしやらなかつたりいろいろなことがあるんですけども、忙しさを言ったら切りがないです。学校情勢も土曜日がなくなりまして、先生方は忙しい、忙しいといいながら、削れるところをほとんど削らず、いらぬ会議をして、子どもたちにしわ寄せを持っていくわけなんです。

そんなことも感じながら、今日、ご協力ができたらうれしいなと。たまたま教員2人を持っていましたので、指導者としてやっておりますので、お役に立てればと思ひましてもまいりました。

総合司会 プロジェクトの皆さんからも、簡単に一言ずつお願いいたします。

金子 私は、教員養成カリキュラム開発研究センターの講師をしております金子と申します。

腰越 学大・教育学科の講師でございますと申します。よろしくお願いいたします。D先生、先ほどは(速記者の方と)間違えまして大変失礼いたしました。今、お話を伺いまして、気持ちがお若いから(若い速記者の方かと思ったのでした)。間違えまして申しわけございませんでした。

湯浅 国語教育・日本語教育の湯浅佳子と申します。

富江 本センターの研究支援推進員の富江と申します。今日は、アンケート調査の紹介をさせていただきます。よろしくお願いいたします。

池田(義) 数学・情報科学科の池田と申します。ディスカッションに入りましたら、司会の方をやらせていただきます。

総合司会 私は、カリキュラム研究センターの岩田でございます。よろしくお願いいたします。

荒尾 副学長の荒尾と申します。私はこの研究プロジェクトの計画について、もとからかかわるところが少々あるんですけれども、今日の座談会については打ち合わせを十分できないままに出てきましたけれども、今話をお聞きして頭の中が整理されました。後でまとめなどを申し上げさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

センター長 先ほどごあいさつ申し上げた高城でございます。教員養成カリキュラム開発研究センターのセンター長でございます。

先ほど申し上げるのを忘れてしまいました。昨年の3月という大変お忙しい時期にアンケート調査を実施し、ご迷惑をおかけいたしました。これには我々の責任もあるのですが、ひとつには大学の予算のシステムから、こういったプロジェクトに経費がおりてくるのがかなり遅くなってしまいます。そこから始めるとアンケート調査の実施がどうしても遅くなってしまいます。本来ならば年度内に完了しなければならぬのですが、去年は、年度内に完了させることは無理ということで、締め切りを、年度を越した4月でお願いしたつもりだったのですが、それでも先生方はお忙しかったようで、なかなか回答いただけなかったと……。後ほど、アンケート結果の紹介のところで説明があると思いますが、たくさんの方からはご回答はいただけなかったのですが、それでも、多分、多くの方からご回答いただいたとしても大きな違いはなかっただろうというような、大変興味深い結果が出ておりますので、よろしく、お話し合いのほどお願い申し上げます。

池田(延) カリキュラムセンターの池田でございます。午後の研修の公開研究会にもぜひご参加ください。PRさせていただきました。

三石 三石と申します。私は、カリキュラム開発と評価の実際や、それにかかわって現場の先生方がどういう環境で、どういう力を培ったらいいいのか、そんなことに関心を持ち、年に40校くらい訪問し、お話をうかがってもきました。よろしくお願いいたします。

佐久間 同じくセンターの講師の佐久間亜紀と申します。10年くらい前まで、 δ 市内の高校で教えておりました懐かしく思います。今日は、ありがとうございます。

筒石 本プロジェクトの研究員で、今日は記録係の音楽教育の専門の筒石と申します。去年は中等教育の教員養成のプロジェクトのとりまとめをしておりましたけれども、今日は記録をとりながら、皆さんの議論を楽しみに聞かせてもらいたいと思います。よろしくお願いいたします。

総合司会 今、紹介がありましたように、このプロジェクトは本センターの高城センター長がトップで、センターが中心にマネジメントをしているわけなんですけれども、それこそ数学やら、音楽やら、国文学やら学内のいろいろな先生方に集まっていたいて、みんなで研究をしていく形を取っております。私どものセンターは、お手元にパンフレットも

ありますけれども、学校教育カリキュラムの研究開発部門・教員養成プログラム研究開発部門・教員研修プログラム研究開発部門と3つありまして、それらが一緒になって仕事をしているということです。

お手元にあります資料ですが、本日のプログラムと、昨年行いました「教員の生活と教育課題に関する意識調査」の質問紙本体、質問紙調査の結果概要についてのレポート、自由記述をまとめたものをお手元に用意しております。これらと別に、今回出席を呼びかけたお返事のおはがきですとか、ご意見などをまとめたものも用意しております。

〔「教員の生活と教育課題に関する意識調査」結果の紹介〕

総合司会 それでは、昨年行いました「教員の生活と教育課題に関する意識調査」の結果について、富江さんの方から報告をお願いいたします。

富江 私の方から簡単にご報告をさせていただきます。

幾つか資料があるんですけども、最初に「教員の生活と教育課題に関する意識調査」に基づく座談会で調査に関する補足資料という2、3枚とじてあるものですが、こちらの方は調査概要です。どのようにサンプルを選んだとか、有効回答数が163ということでございます。ちょっと全部は説明できないんですが、埼玉県内の小学校、中学校を対象に調査をしたということが書いてあります。

その次にありますのが、この質問紙そのものです。アンケートそのものです。回答をいただいたので、もうご存じだと思いますが、一応議論のための資料としてご用意いたしました。

次が、「教員の生活と教育課題に関する意識調査結果概要」ということで、このグラフがいっぱいあるやつですが、これは事前に皆様に郵送させていただいたものと、ほぼ同じでございます。とりあえず簡単にご説明させていただきます。

1枚目、2枚目は、フェイスシートのなご自身に関することです。担任をしているかとか職務に関して、通勤に関してとか生活に関してということでございます。ここでは、小学校、中学校の割合がどのくらいの割合かとか、男女比とかです。

3枚目、4枚目は、この調査におきまして、あなた自身がお感じになっていることということです。「どのようなことをレベルアップさせたいか」ということで、こちらから項目を出しまして、それを「ぜひレベルアップさせたい」「機会があればレベルアップさせたい」「必要ない」と、その尺度3段階でお聞きしたものでございます。3枚目が一覧表ということで、次の4枚目の棒グラフは、「ぜひレベルアップさせたい」というものが多い順番に並べたということでございます。

それで、簡単に傾向を申しますと、上位の「ぜひレベルアップさせたい」というのが多いのが、例えば「総合学習の関連」であるとか、または「問題行動児のカウンセリング」とか大体そういうものが多い実態です。逆に少ないのは、「ぜひレベルアップさせたい」というのが少ない、このグラフだと下の方にいくものは、「会議の円滑進行のためのスキル」だとか、「同僚と共同する」とかそういうもので、会議の円滑進行というのは全体的に少なかったという傾向であったかと思えます。

次にいきまして、5枚目、6枚目、7枚目というところでございますが、ここには同じ質問項目ですが、あなた自身ではなくて教員一般としてどうかということ。適切な場はどこかということで、卒業前にやる——大学でやるんですが——卒業前にやるのがいいのか、それとも大学、大学院における現職研修のプログラム、要するに現職研修でやるの

がいいのか、またはその他という3つの選択肢から、どれがいいか選んでもらったということです。無回答というのがあるんですが、「その他」は、こんなものは必要ないというのか、または大学卒業前でもなく、そして大学、大学院における現職研修でもない、別のところでやればいいのではないかとか、そういうのを書いているかと思うんですが、そういうのを混ぜてその他ということで結構多いんですが、そういう形です。

次、めくっていただいて棒グラフの4枚目ですけれども、「教員の知識・技能について 教員一般に適切な場 その1」と書いてあるやつで、これは卒業前に大学でやった方がいいというのが多い順番に並べたものでございます。これを見ますと、これも大体の傾向でございますが、一番上が「授業目標達成のため、学問の知見を得る」ということです。学問的なものということです。上位で目立っているのは、情報化時代の中で、メディアリテラシーを持つとか、そういう情報化何とかという。平たく言えば、パソコン関係のスキルとか、大体そういうものが結構上位に来ているという感じです。逆に下位の大学で卒業前にやった方がいいというのが少ないのは、問題行動児にどのようにアドバイスをするとか、進路指導とか、大体そういうのは少ないような感じがいたします。

次、めくっていただきまして7枚目でございますが、「その2」と書いてあるものですが、今度は現職研修です。「大学、大学院における現職研修でやった方がいい」というものの多い順番に並んでいるということでございます。上位の方に来ているのは、「クラスの円滑運営のために学級経営例を知る」とか、先ほど少なかった「問題行動児の親にアドバイスをする」などが上位に来ております。下位に来ているのは、「自らの人生を豊かにするために地域ボランティアに参加する」とか、そういう人生を豊かにするために云々というのは低いということです。「その他」というのが多いので、必要ないということかもしれません。大体そういうような傾向でございました。

最後のページへいきますが、これは「現職のまま大学院で研修を受ける際に、どのような事柄を重視しますか」ということで、ここに挙がっているような選択肢がございます。3つ以内でお選びくださいということで回答をしていただいたものでございます。一番多いのは「授業の内容」ということで、修士論文の有無という回答は低いです。年齢層別にはどうか、性別にはどうかというのを見たものが、その下の表でございますが、これは例えば一番上の、「距離・通いやすさ」49.7とありますが、49.7%の方が回答者の中ではこれを選択したということなんですが、これを、49.7%の人はどのくらいの年齢なのか、性別はどうかということ単純にばらした数字が、この下の表になっています。

ただ、年齢とか男女を回答していない、無回答の方はこの表からは外れていますので、ちょっと小数点あたりがずれていることがあります。それは無回答を飛ばしたので一致しないということでございます。

この表を見ますと、年齢層別というのはそれほど傾向は出てないのですが、強いて言えば、40歳代、50歳代で「研修中の勤務条件」というのがちょっと多いという感じだと思います。男女別の方は、結構これは差が出ていまして、女性の方は、「距離・通いやすさ」とか「開講時間」とその辺のものを重視するというのが多く、一方男性の方は「研修中の生活」とか「授業料・奨学金制度」そのようなことを重視するというのが多いということです。

簡単でございますが、大体このアンケート調査の統計的な分析のご紹介は以上ということになります。

次に、自由記述に答えていただいたものを、全部単純にリストアップしたものをお配りいたしましたのが、自由記述の問3、問4となっております。見ていただくと分かる

んですけれども、問3の方は、「大学院、行政研修、校内研修をやった方がよいと思われるプログラムの内容に関してご意見ございますか」ということで、問4の方は、もっと広い質問で、「現在及び今後の教員養成・研修のあり方についてのご意見ございましたらお書きください」ということで書いていただきました。

これをお配りして、非常に恐縮なんですけれども、読んでいただければ非常におもしろいんです。非常に多種多様な意見があるわけで、まとめるというのは当然無理なんでございますが、一応私なりに申しますと、問3、問4とも含めて、まず、どういう内容の現職研修のニーズが多いかということ、先ほどもありましたけれども、いわゆるカウンセリング的なものであるとか、LDとか障害を抱えた子どもへの対応とか、そういうのが比較的目標立つという感じです。

それで、要望というのは、いわゆる大学の先生の講義というか考え方というのは、やはり現場から離れている。もう少し現場を知ってくださいということです。強いて言えば、そういうのが比較的に目標立つということで、より実践的なものをということです。あと、ちょっといろいろとおもしろいものがあるんですが、余りこの場で私が言ってしまうと、それに引きずられるのもあるかと思っております。

あとは、全体としては、これに答えていただいた方に限られるんですが、教員研修が意味がないとか、上からの押しつけはやめてしまえとか、そういうマイナスのことを書く人はかなり少なかったです。ということで、サンプル少ないながらも、やはりそれなりのニーズがあるんだなというのは私なりにはつかめた気がいたしました。

簡単ですけれども、一応、私からは以上です。

総合司会 分析を担当した腰越さん・金子さんの方から、補足することがあればどうぞ。

腰越 問3の2は、私も少々分析をしてみました。年齢層と男女別の表のところなんですけれども、特に年齢別ではこれを見ただけでは何のことか分かりにくいかと思います。ですが、20代・30代の回答と、40代・50代とを比べますと、若干差があるという感じがいたします。口頭で恐縮なんですけれども、「勤務時間」とか、「履修のしやすさ」、「授業内容」、「研修中の勤務条件」の項というのは、年齢が上がるほど選択されています。逆に20代・30代の若年齢層と比べて考えてみますと、若年齢層が選択しているのは、「研究指導の主体性」とか、「授業料・奨学金制度等の状況」、「研修中の生活」の各事項です。若手は授業内容、ベテランは内容の点もさることながら、環境が現職研修を受ける、ある種の動機付けになっている、というような感じです。もうちょっと平たく申し上げますと、ベテランは学びたい内容を家族とか経済面を含んだ有利な環境下で学べるかどうかを考えます。他方若手の先生は、研究体制とか奨学金制度とかを考える。要するに、自分自身へのよりよい処遇を中心に考える、といったことを指摘できる気がいたします。

それから、生活の方は、さっき富江さんが言ってくださっていたことなんですけれども、ちょっと屋上屋の嫌いを恐れながら申し上げますと、両方に共通しているのはやはり授業内容の重視です。ただ、男女の違いを見ますと、先ほども出ましたけれども、男性は研修中の生活、家族、経済、それから通いやすさ、研修中の勤務条件を重視する。これに対して女性は、圧倒的に通いやすさと開講時間と勤務時間の関係を重視します。これもまた勝手な解釈なのですが、地位達成志向の推進というのが、男性には全体として容認される傾向があるのに対して、女性の先生の方は、まず家庭生活の維持というのがのしかかっている。

現に私は、教育学の夜間大学院で、このOB、OGの先生方の夜間の授業を持たせていただ

いているんですけれども、やはり30分から1時間は遅れて来られるわけです。特に、女性の先生と男性の先生のお方でいらっしゃるんですけれども、女性の先生の場合は、お子さんをどうするかということもあつたり、病気になってしまつたり、あるいは学童からまたどこかへ、ちょっと預かってもらえなかつたりすると、授業に来られなかつたりと、そういうところがやはり非常に現実的な問題としてあるということが、こういうデータからも確認されますし、自分の経験からも確認されるという気がいたします。そういう点で男女差が若干あるということがわかりました。

以上です。

金子 本日は、小学校と中学校の先生に来ていただいておりますが、それぞれの学校種別によって、現職研修に求めていらっしゃるものが違うと思います。今回の質問紙調査の項目だけに限らず、より一層具体的なところをお聞かせいただければと思います。

総合司会 今、アンケートの結果概要についてこちらから紹介があつたわけですが、先生方の方からお聞きになりたいこと、あるいはこれをごらんになってのご意見などいろいろあろうかと思ひます。そういったことも含めまして、これからざつぱらんにお話しただければと思います。

ここからの司会を隣の池田先生にかわります。プログラムにも紹介がありますが、本学には現職教員研修支援センターという組織がございます。これは大学院で現職の研修を受けたいという方の学習をサポートするセンターです。こちらの池田先生はそのセンターの管理運営部門の副代表でもありますので、こういったところのまとめ役としてはうってつけかと思ひます。よろしくお願ひします。

[ディスカッション]

司会(池田義人) ただいま、ご紹介いただきました池田です。これからの進行をさせていただきますので、よろしくお願ひいたします。

最初に、2点ほどお断りしておきます。本日の座談会については記録をとることをお許し願ひたいと思ひます。それと、高城センター長は、この後会議が重なりますので、この座談会の途中で退席させていただきます。

では、座談会に入らせてもらいます。ねらいなどは既に先ほどからの話の中で説明されていますが、アンケートからはなかなか酌み取れない先生方の生の声をお聞きしたいということです。先生方は毎日ご苦勞をされている中で、さまざまな意見もおありでしょうが、それらを大学のカリキュラムですとか、あるいは教育審議会とか、広く社会に対しての要望という形でお聞きしたいと考えております。本プロジェクトの報告書としてまとめたものが社会に出て、方々に送られたりしますので、十分そういう意味ではチャンスかなと思ひます。

ねらいは、先生方のニーズ、教員研修に対するニーズということですが、これは大きく2つあります。一つは先生方が、「大学時代にこういうことを勉強しておけばよかった。だから、新しい先生方には、ぜひこういうことを身につけてもらいたい」というような、そういうニーズもあります。これは大学の養成カリキュラムでの意味があると思ひます。もう一つは、6年研修とか、10年研修とか、これから先生方が研修をされるときに、こういうことを勉強したいというものがあると思ひます。

そういう二つがねらいとしてあるんですけれども、実際はここにありますように、先生方のいろいろな状況の中で生活されていて、非常に細かい何気ないことの中から、そういうものが浮かび上がってくるものだと思いますので、余り意識されないで自由にお考えを述べていただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

それでは、今、アンケート結果を富江さんの方から話していただきましたけれども、そのことを含めまして、アンケート用紙を手にしてからここに至るまで、お考えになってきたことを、最初に一人ずつ、自己紹介とは違った意味で我々に提起するような形でお話しいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

D 私、たまたま初任者2人を担当しております、このアンケートの幾つかを初任者にもアンケートしてみたんです。あなたは去年まで大学生だったんだけど——2人も埼玉大学だったんです——どういうものが大学時代と今と照らし合わせて、大学でどんなものが学べればよかったかと聞いてみたんです。そうしましたらその結果は、私たち教員が思っているものとは違う、まるっきり反対なんです。

この結果をいただきましたので目を通していただけたんですけれども、私たち現場の者は、結構学問的なものですかをやった方がいいんじゃないかということも思ったんですが、初任者1年目の2人は、男性と女性なんですけれども、それよりも現実的なカウンセリング的なものとか、それから親との対処法ですとか、それに苦勞をしているせいかもしれませんが、そういうものをもっと大学で教えてくれたらよかったという声が、2人ともから聞かれました。学問的なものは、比較的今の若い人たちはいろいろな場所で得る機会が多らしく、それよりも現実的な問題行動的な子どもの対処法だとか、そういうものをもっともっと大学で教えてくれたらよかったのという声が聞かれました。ちょっと、その点がまるっきり私が思っている、チェックしている部分と正反対に出ましたので、それは面白いなど。大学であなたにどういうことを教えてくれたらうれしかったというのが、まるっきり反対だったものですから、それについては意外だなと思いました。

C 私の場合は、直に今年初任者と接しました。週に2日は校内で研修しますが、研修の間は、私がそのクラスの授業に全部出るという形なんです。話をしたりとか、クラスを2人で両輪のように持つような。本来そうではないんですけれども、どうしても私が年数が多いということで、学校の中でそんなふうになりましたので、いろいろ感じたことがありました。

例えば、これは個人的なものかもしれないんですが、教材をつくったときに、分析をしたり、段落を分けたり、どう教えようかとかということとはよく勉強するんですけれども、それを書いた作者とか、同じような本でこういうのがあると紹介されている本とかはほとんど知らない。忙しいせいもあるんでしょうけれども、余り読まないんです。

ところが、例えばパソコンとか自分の興味のあるものに関しては、非常に深くよく知っているし、子どもにも即実践として使える力を持っていて、私などはとてもかなわないというふうに思っております。アンバランスをととても感じました。

あとは、技術的なものなんですけれども、男の先生だったせいか、採用試験が今はとても厳しくて、ピアノとか実技を受けて入っているわけなんですけれども、ピアノに関しては、ほぼ9割以上実践で弾ける先生はいないのではないかというのが私の感想です。聞いてみますと、相変わらずバイエルを弾いて付け焼き刃のような試験で、とりあえず何番だけは弾いてと。もちろんそこに関しては一生懸命やって通るんでしょうけれども、それで現場に出てくる。それが20年以上も変わって

いないということで、これはやはり大学でも少し。

オールマイティーの人間をつかってほしいとは思わないんですけれども、実践力ということに関して、どんなふうを考えていらっしゃるのかと疑問に思います。

同じように、やはり小学校は割とオールマイティーを要求される職場ですけれども、人間ですから向き不向きがあると思うんです。体育系とか、芸術系とか、その辺は最近は何か試験を何秒以内でクロール25メートル、帰りは平泳ぎを何秒と。途中でピッと笛を吹いて、時間内にできなかつたらその場で終わり。

試験とはいえ、これって子どもにこういう課題をやって、こういう試験のやり方をしたら、親からもう少しできない子に関する人権を考えてほしいとかクレームが来ないかなと思うような。実際、私の試験を受けたことではありませんので、聞いた話ですけれども、もしそれが事実だとしたら、学生はまず採用試験を通らなくてはいけませんから、こんなことを考えて学ぶのかなと。子どもに対して、まさかそんなことはしないだろうなどと不安を感じます。

あとは、やはり親との対話をとても苦手としていまして、何か起こるたびに、どうしたらいいんだろうと、よく言えば相談、悪く言えばかかり切りで頼るといえるのか、自宅にも電話がかかってくるような状況です。これが1件だけではなくて、以前にやったときにもそういうことがあったので、その辺が気になります。

池田（義） 先ほどのD先生のお話の中にも、親との対処法に苦勞をされているというのがありました。

C ハウツー物というか、そういうものを求める傾向が強くて、資料をいろいろ持ってくるのはとても早いですけれども、読み込んで実践するというのが、いま一つかなと。

D 指導者の責任ですね。

C いや、一人を攻撃するということではなくて、前任校でもやはり初任者がいましたので、そう思いました。

B 時間もあまりないようなので、教員養成に直接係るかどうかわからないんですが、中学校の現場の声をちょっとお伝えしたいと思います。

まず一つは、今、中学校の現場は教員の高齢化が非常に問題になっています。小学校でもβ市内の学校では、3クラスあって担任の先生が全部50代なんていう学校もありますので、新任というか若い先生は本当に首を長くして待っているという感じです。早くそういう人が来ないかなと思っているところがあります。

大体、私立の中学校へ行ってしまう子が25人で、最近、中学校へは小学校から来てくれない。入学予定者の1割を超えるぐらい私学の希望があります。だから、思うように採用が進まないのかと思います。

なぜ、公立中学校に来てくれないのかというところを掘り下げていくと、非常にこれもオフレコなかもしれませんが、授業が古くさいのではないかと私は思います。来年ですか、各教室に大型のプロジェクターが配置されます。コンピューターも2台ずつ各教室に入る。そういう意識で授業をやっている人は、実は余りいないのではないかと。

この間も、ある雑誌で読んでいたんですけれども、今の先生たちのしゃべり方というのは、今

の子どもたちにとっては遅過ぎるんだと。今の子どもたちはもっと早いテンポでいろいろなものを取り込んでいきますから、例えばベテランの私も含めて、40代、50代の先生たちの今までの授業では、子どもたちはつまらなくてしょうがないんです。

かといって、習熟させるためには、じっくり時間をとってやるような基礎基本のものの基礎基本になるんでしょうけれども、小学校の単元の習熟を忠実にやらせるというのも実はできていないんです。そのようなことで伸びないまま中学校に入って来るというのも決まっていますから、国語の授業は週4回では、とてもではないけれども小学校の漢字をやって、中学校のものを教えて、文法もやってなんていうことをやっていられないので、総合の時間にどうしてもそういうことをやらないと学力がつかないのです。そういう意味で中学校のカリキュラムの構成を今まじめにやらないと、保護者の方からそっぽを向かれてしまうのではないかという危機感を、私自身は持っています。

授業を改革する。そのためには何が必要かということ、確かにこの座談会では研修のあり方を問うんでしょうが、現場の即効薬はTTと少人数学級です。どんな形でもいいから、教室の中に複数の人間が入ることで、どんな教員でも授業をまじめにやります。私もそうです。

私は、毎日授業をやっていてそう思うんですから、これは説得力あると思うんですけれども、私の持っている3年生2クラスと1年生2クラス、それから1年生の選択の授業、一応5つの学習集団がありますが、この中でADHDの子が1人入っている集団があります。ここに、埼玉県が特別に予算立てて、さわやか相談員は別にいるんですけれども、教室に来てくれるひまわりサポートという制度をことし入れてもらいました。4人の方に来ていただいて、うちの方は特殊学級もありますので、特殊学級の方に行ってもらうときもあるんですが、その授業の関係で普通学級の方にも何時間か来てもらっています。このADHDの子どもについてももらいました。

非常に私も自責の念が強いですけれども、一斉授業という名のもとに飛ばして授業をやりますと、しかもその子は置き去りにされてしまう。普通に、みんなと同じように同じページを開けて、同じように同じスピードでノートを取るということはできません。そこで多動の子で動いてしまったりすると、それはだめだよとか、危険だよとか止めるんでしょ、一切授業の中で何もしないというか、教室に座っているんだけど、特に下調べ学習をしていない場合、どうしても見落としてしまうというか置いてきてしまう。その子に対して、そのサポーターさんがいれば、何ページを開けなければだめよとか、みんなここをやっているじゃない。宿題をやってこないじゃないかということ、随分問いかけてくれるわけです。

そうなる、私自身も、じゃあ、ほかの子たちにはこの課題をやっているときに、この子には、個別にこの課題を与えて、じゃあ、サポーターの先生、ここまで見ておいてくださいと、そういう授業はできるんです。もし、これをいろいろな保護者の方が授業参観の場か何かで見てくれたとしたら、何と個別に厚い指導を今の学校ではやるのかというふうに見てくれる。実際、このことを期末テストの終わりに体験したんですけれども、昨今は観点別で評価をします、定期テストの質の観点に応じた出題をします。その中で、1年生の3学期ですから、国語の時間では編集論も入るんです。

編集識別が中心になるんですけれども、その配点を20点分出したところ、そのADHDの子は——LDの子はちゃんとした字が書けない子が多いですが——やはり文字障害のある鏡文字を書いたりする子なので、漢字の配点は20点のうち3点ぐらいしか取れないのですが、文法の言語事項の問題に対しては18点、9割方できてまして、実はこれがクラスのトップだったのです。

みんな文法できなかつたねという話をして、でも、最高点はK君だよ。「えっ」と皆が言った。それは、たまたまその日にひまわりサポーターさんの任期が2月で切れる最後の日だったん

です。僕もそのサポーターさんに、「おかげさまでK君がこんないい点を取りました」と言いましたら、非常にそのサポーターさん自身もいい笑顔で学校を去って行かれました。また、ぜひ来年そういう機会がありましたらお願いしますということで、私自身も心の奥から感謝申し上げたんです。

これはTTではないんですけれども、似たようなもので複数の教員がやっているということです。

池田（義） ひまわりサポーターという制度は、埼玉県でやっているんですか。

B そうだと思います。今年から入りましたので。

これは、行政が予算をつけてサポーターさんを入れていただいた例なんですけれども、都内の公立中学校でも、たしか1週間に32時間のカリキュラムで45分で通している学校があります。その校長先生のお話を聞いていたら、その学校は、放課後の5時まで、とにかく私立中学に負けないために量で勝負だということをおっしゃって、週32時間の授業の中で、普通の学校は国語は3だけれども、うちの学校は4時間、あるいは5時間やると。文部科学省は50分と言っているけれども、それは標準であるから、45分で32時間やった方が、50分で28時間よりはるかにいっぱいやると。この量で勝負だと。

32時間で勝負した上に、毎日5時まで補習授業をやるんです。その補習授業は、実は教員ではないんです。その補習授業をやるのは、塾の先生だったり、あるいは私立高校の講師をやっている人だったり、教育実習生だったりということで、教員ではない人たちが毎日5時まで勉強を見ている。そこにスタッフガードみたいなものをしてきている。そういう例を去年伺ったことがあるんです。

これは、親御さんから見れば、こんなにやってくれるなら塾に行かなくてもいいではないかと思うかもしれません。ところが、その学校では朝の合唱というんですけれども、いわゆる朝の一斉読書ではなくて、子どもたちに歌わせるんです。そういうことを毎日やらせる。「それは総合の時間でカバーするんですか」というと、いや、していないと。それはあくまでもその他の時間でやっているという話で、とにかくいろいろな意味でサービスをその学校はしていました。

非常に興味深い実践だったので、私も学校にいろいろ行って取り入れたり、利用をしているところもあるんですけれども、東京と埼玉では予算のつけ方も違うし、埼玉はそういう時間講師はいませんのでなかなか難しいところがあるんです。

そこで言えることは、今、セキュリティの問題でいろいろ難しい面もありますが、「地域との連携とか、地域に開かれた学校とかに、どう関われるか」という問題があります。地域に開くというのは、うちの学校も地域と連携して、地域のお祭りを一緒にやったりとか、成人式でうちの子どもたちが参加したり、そういう地域とのふれあいとかがあるんですけれども、意外と学校の教室の中に何か見えない壁が高くて、地域の教育力が入っていかない。でも、理想的に言えば、1班に1人くらいお母さんが入り、6人くらいのサポーターがついていて、教員は、カリキュラムを含んで指導計画をつくって、今月はこういう勉強をします、今週はこれをやります。だから来てくださいということでお願いして、プロジェクトを進めていくような、そういう授業をこれからはやっていかないと、世の中からもう受け入れてもらえないのではないかと。

そのためには、もっと小学校もそうだと思うんですけれども、中学校はもっと教材研究や教材開発をする時間をとって、もうちょっと授業に絞った学校経営をしていかないとやっていけないのではないかと。そのためには、本当に学校の専門化という問題も出ていましたが、学校はもっと

もっと授業だけに絞って、いろいろなところは地域に委ねる。極端なことを言えば、運動会なんというものは地域でやっている運動会にあげてしまえばいいと思うんです。そこに教員が参加しても構わない。そのくらいのつもりで、もう学校はほかのものは全部捨ててしまっ、授業、お友達もやってるわかる、おもしろい、そういう授業をつくっていかないと、生きていけないのではないかというのがあります。そういう学校にこれからはなっていくのではないかと私は思うのです。

そういう学校でこれからの若い先生たちが備えなければならない資質に関わって言えば、臨採の先生がもっているものがあります。「今度の人は臨時採用の人ですか」と校長先生に聞いて「そうだ」となると、みんなの顔がほころびます。なぜか。若い臨時の先生が来るとパソコンができます。部活を持ってもらえます。動けますから、40代、50代の先生が来るよりも、半分とか3分の1のお給料で現場は非常に助かる。私が学校の主事をやっているときに、50代の先生が腰が悪くて、病院に入ってしまった。その代わりに来たのが24歳の剣道5段の、大学を出て3年目という方でした。この人が来たおかげで、私はその1年間大変楽ができました。成績処理から、学級編制から、あらゆるものを自分でエクセルで組んでました。「こういうのができるのかな」と言ったら、「できます」と言うので、「これをやってくれる」と。ああいうのは、もう何人力というんでしょうか。部活が持てて、パソコンを自由にやれるという、そういう資質を持った若い先生というのが中学校の現場にはとても欲しくて。

今、中学校の現場は、結構あちこちでパソコンをやっています。パソコンを使える先生とか若い先生が、年配の先生に「こういうことができるんです」というのを教えてあげている。瑣末なことかもしれませんが、卒業式の案内状を出す時、リストアップすると150人のデータがある。今までの学校は、それを教頭先生から事務の人が手分けして宛て名書きをしていたんだけど、それをパソコンソフトで組んでしまえば一瞬でできます。そんなことを若い先生はできますので、学校現場もだんだんとそういうふうになって変わってきていますので、ぜひそういう力を持った大学生をこれからも養成していただければいいなと思います。

6年研、10年研でやりたいといったら、時代はどんどん激しく変わっていますので、その流れに乗って、こういう力が必要あるだろうということを本人にわからせるみたいな研修が必要なのかなという気がします。

池田（義） かなり大胆な意見をいただきました。他の先生もいろいろな見方があるかもしれませんが、また後でお話をいただきたいと思います。

A 私は、大きく分けて2つお話をしたいと思います。

一つは教師の意識のことについて、もう一つは日本の教育の中での研修の難しさについてお話ししたいと思うんです。

まず一つは、教師の意識ということなんですけれども、十数年前に、アメリカの教師と日本の教師の意識の比較の調査というのをやったことがあるんです。そのときに、すごく興味深かったのは、勤務が終わった後のそれぞれの生活の違いなんです。アメリカの教師、ニューヨークの教師だけなんです、ほとんどの方たちが教育の専門学校に通うとか、自分で教員としての資質を高めるといことで、教育現場に勤務終了後に向かっているんです。日本の教師は、大半が学校にいるんです。そこがまず大きな差です。

なぜそうなのかというと、日本は先ほど非常勤云々という話もあったけれども、年齢で給料が決まっているけれども、ニューヨークの場合は、アメリカ全土もそうかもしれませんが、

取った単位数で給料体系が変わるんです。だから、自分が夜学校に通って単位を取れば取るほど自分の給料を上げられる。そういうことから違いがある。明らかに、もうそこで教師としての意識の違いが出てくると思うんです。

もう一つは、その中で明らかに日本とアメリカが違ったのは、教育に対する考え方なんです。それはどういうことかという、一つは、担任の先生は授業をすればいいと。子どものアフターケアはカウンセリングの先生がやっている。完全に分業がなされているんです。ですから、今のことが成り立つわけです。日本の場合はどうかといたら、それが合体しているんです。そこがまず一つ、これから教員養成のカリキュラムについて考えなければいけない根底だと思うんです。

二つ目に、では、その合体している日本の教育のカリキュラムで一番難しいということは、日本の教師というのは、恐らく今話を聞いていてもそうなんですけれども、大半が経験則で動いているんです。要するに子どもの実態に即して動いていると言いながらも、実はほとんど自分が得てきた経験則で動いている。だから、その結果が明らかにこの中に出ていると思うんです。なぜかという、カウンセリングの研修が必要だと。インターンというのがあればいい。これは明らかに経験則で動くということを前提としているから、こういう研修が必要だというふうにとらえているというように私は読んだんです。

だから、あくまでそれは日本の意識としては合っていると思うんですが、初任者はさっきハウツー本がどうだのと出てきましたけれども、それは自分の経験がないから、ハウツー本を読まなければできないからハウツー本に走る。いつまでたってもハウツー本を読んでいるような日本の教師はだめだというふうに私は思っているんだけれども、結局、経験則ということをもとに教師は常にその研修を考えるから、インターンだとか、例えば4年生は1年間大学へ行かないで現場に出ればいいのかというようなことになってくるんだと思います。

では、実際に教師が学校に就職してどうかという、まず問題なのが採用試験に関わってくると思うんです。先ほど、バイエルの48番が云々という話があったけども、私も48番しか弾けないというので自分で告白したんです。そしたら、面接官が笑っていましたが、そのとおりで思うんですけれども、今の初任者研修というのは、あくまでも学校で何をやるかという経験をつくる研修なんです。例えば、保護者が学校へ来たらどうするか、この授業ではこんな指導案を立てるんだとかというような経験をつくる。

そうすると、では、今ここで求めている教員養成の大学、我々教員が途中で行ける大学院とか、そういった研修で何が必要かとなると、もう一度自分が教育の中で必要な学問を呼び起こして、それを今の自分の経験と結びつける場でなければいけないと思うんです。今、私たちグループでやっていることは、私も本当に駆け出しで偉そうなことは言えないのですが、認知心理学を取り入れた授業ということなんです。今、すごく認知心理学というのはもてはやされていて、私もそのもてはやされているということで食いついただけなので、細かいことはお話できませんけれども、そういったことが今現在私たちが必要としている研修ではないかと。そして、最後はそれを常に自分たちがやっている授業を、どういう立場に立って裏づけることができるかと、そこまで進むことが私たちにとって必要なことなのではないか。

だから、研修のカリキュラムとしては、経験をつくるということはもう研修会ではできませんので、やるしかないと思うんですが、実際にある程度経験を積んだ教員が、もう一度その学問を呼び起こして、子どものそういった心理学的な、かつての教育心理学でもいいけれども、そういったところと結びつけるカリキュラムができれば、ひとつ日本の教育がまた進歩するんじゃないかというのが、私の今の考えと結論なんです。

池田（義） 本当にいろいろお話をお聞かせいただきありがとうございます。

今、現場の4人の先生方からお話をいただきました。それぞれ大変貴重な意見だと思います。中には運動会はもうやらなくてもいいんじゃないかみたいな思い切ったご意見もありましたが、どうでしょうか。それぞれ4人の意見を参考にしてご意見をお聞かせ下さい。

C 小学校では、もちろん行事は精選されていますけれども、行事の中で子どもが育っていくということがとてもあると思います。どちらかというと、「総合（的な学習の時間）」が始まったときに、学校独自のプログラムをつくるわけですから、本当にえらい思いをしまして、研修をしました。今年、3年生を担当していましたので、本当に発表の仕方もよくできないような集団を、そういうことが得意といいますか、今までと違った価値の中で私たちも育ててはいけないというように、目指す将来の人間像みたいなのところまでも、私たちがあくまで考える大人と違うような21世紀に生きる子どもたちというのを、自分の頭でまず改革しなくてはと、そんなことを思いながらやったんです。

1年間やってみて、お別れ会を昨日してくれましたけれども、やはり涙が出ました。それは浪花節とかそういうことではなくて、子どもというのはいろいろなことをいたしますけれども、やはりやったことに関してはそれなりの成果が確実に出る可能性がある。中学校と事情は違うと思うんですけども、子どもは勉強の好きな子もいますが、行事でうかばれる子、活躍できる子、そういうものがとても多い。親も地域を考えながらやることに関して、そういう面、協力意識がすごく大きい地域だったものですから関心が高いんです。どちらかといえば、私も行事は小学校は準備が大変ですから減らした方がいいかなとか、自分たちの首を締めるようなことを、たくさん何でもやらない方がいい、というふうな派なんですけれども、そういう私でもやはりある程度は子どもを育てるためには、仕方ないのかなということを実感しています。

池田（義） すみません。私の不手際かもしれません。先生は、運動会はいらないとは言っていてなくて、要するに運動会は地域でもいろいろやっているわけですから、そっちと一緒にやればいいということですね。だから、行事の中で子どもが育つということは、よくわかります。

B 私は別の見方があって、「総合」と学校行事の兼ね合いというのも現場では非常に難しいところがある。中学校ではもう逆転現象が起きていて、小学校の4年生でやった「総合」の方が、中学校2年生のものよりレベルが高いということがあるんです。小学校でも3年生と5年生を比べて見ていて、5年生でやっているのが3年生に負けてしまうという、そういうものがあるんです。「総合」の話を出すと別のことではあるんですけど。

うちの埼玉県でスリーデーズチャレンジという職業体験学習をやっているんです。埼玉県からきているもので、一応3年間で今年で終わるんですけども、β市では非常に好評だということで、来年から市の予算で新しいスリーデーズ社会体験をやるんです。保護者の方と最後の実行委員会がありまして、あるお母さんが、「どこかの消防署とか事業所に行って体験学習をしているところにお母さんはなかなか来ないと子どもたちは言うが親としては見てみたい。働いているわけではないので、体験学習ですからそれぐらい見せてほしいんですけども」と言ったら、実行委員のある小学校の先生が、「それは学校の方でそういうマニュアルがないからだめだ」というお叱りを受けたんだそうです。

だから、そういうスリーデーズチャレンジみたいな、学校から3日間出て地域のいろいろな所

へ行って学んでくるものを、「総合」の中でやってもいいんじゃないかというふうに私は思っているんです。これは、今までは埼玉ではそれは「総合」とは違うんじゃないかと、別枠で組んだんだけれども、そういうのもその中に入れてしまっているのではないかと。あと「総合」の発表の話もさっきありましたけれども、私は、「汚い字、間違った字で模造紙に書いて張っておしまい」というのでは「総合」にはならないんじゃないかと思っているんです。そういった体験学習とかもあるんで、子どもたちの力を伸ばしていくためには、「学校だけではできないんです」ということをさっき言いたかったんです。お母さんたちも、小学校なんかはよく近場に行くときはついていったりすることもあるので、「そのくらいだったら私たちやります」といってくれます。そういうところを中学校でもやってもらいたいし、そういういろいろな人の力をかしてもらわないと、学校と地域の連携というのは進まなし、学校で今やろうとしていることも、学校の先生だけではとてもではないができない。そういうことを僕は言いたかったんです。

池田（義） 先ほど、A先生から、授業とカウンセリングがアメリカでは分離されているが、日本はそこが一緒になっているというお話があって、教育に関する考え方は随分日本も変わらなければいけないというご指摘かと思うんです。先ほど、D先生は、アンケートの結果と実際のカウンセリングは違うと。その中で、特に現場では普段の現実的な、カウンセリングとか親との対処法などの指導が必要だということをおっしゃっていたと思うんですけれども。

D たまたま、私が出しました初任者教員へのアンケートとが、はっきり反対なんだということで先ほどお話をさせていただいたんです。

私、若いと言いながらこういう話するとおかしいんですけれども、脱脂粉乳を飲んだ世代なんですけど、そのとき日本の教育はすごいと思ったんです。なぜなら、アメリカでは捨てているような脱脂粉乳、馬の餌、牛の餌のような脱脂粉乳を1円だか5円だかあの缶を買って、そんなものを飲んでる日本が、山の中にも学校をつくり、それから9年間の義務教育をやったわけです。それはすばらしいと。子どもたちに脱脂粉乳を飲ませるような国なのに、9年間の義務教育、どんなに山の奥でも学校をつくった日本はすばらしい。そのときの日本というものはすごいんだと思ったんです。

ある本を読みましたら、天皇陛下が火災で焼け出されたところを視察をして、「食べ物がありますか」ではなくて、「教科書がありますか」と聞いたと。それを読みましたときに、今の教員、学校はどうだろうと。先日、資料を読みましたら、天気予報は72%の人が信じているのに、教員は52%しか信じていないと。それは何なんだろうかと思ったんです。脱脂粉乳から始まりまして、先生方が100%近く信じられていた時代、それから今や「天気予報」以下になってしまったわけです。その時代でしたら、何かお腹に悪い物を食べたら、「天気予報、天気予報、天気予報」と3回言うとあたらないという、そんなおまじないにされるような天気予報だったのに今や72%。ところが、警察と教員が50%ぐらいしか信じられていないのは、教員がだめだからです。

はっきり言いまして、先ほどから「大学が、大学が」と、私たちはついでれかのせいにしたくなって、子どもに問題が起こると父兄だとか、地域が悪いと言いますけれども、自分ではないかと思っていたんです。何でもかと言いますと、私個人の意見なんですけれども、教員が切り売りして、時間的なものがどうこうとか、そんなような学校人生、教師人生を送っていたら、52%どころかそのうちもっと下がるような気がしたんです。私たち振り返りますと、申しわけないんですけれども、「教師になってこういうことを頑張ろう」「こういういい先生になって、父兄と子ども

から絶大なる人気を得よう」と思う時は、大学の先生を頭に浮かべませんでした。やはりその現場にいたすばらしい先生に負けたくない、あの先生のような教員になりたいというのが私の教師人生でした。

今、伺っていて、「大学の先生からこういうふうな教えがあったから、立派な先生になろう」ということではないような気がしたんです。先ほどうちの初任者が、学問はどうでもいいから、父兄とのつながり、教室の対処の仕方を大学でもっとやってくれればいいと言いました。冗談ではないと思ったんです。それは現場の教員がだらしないから、そんなことが出るんじゃないかと思ったんです。やはり大学は勉強をするところです。携帯電話をかけながら教室にいる。噂によりますと、メールを打ちながら大学の授業を聞くとか、言葉すらろくすっぽはっきりしゃべれないで、そういう大学生活でよくぞカウンセリングを学ばせてもらいたいという。小学校も、中学校も、高校も、大学も何よりもまず勉強です。そういう基礎基本的な、どういう教師が立派かということのを大学で教えてくだされば、私は十分なような気がしました。

もちろん、そのためには「生きる力」を大学でもやっていただいて、基礎基本の勉強、大学生に必要な勉強を教えていただいて、さらに現場に行くと立派な先生がいたら立派な教師になると思います。もう最初から4人しか集まらないような、そんなことが悲しかったんです。もちろん大学を褒めるとかではなくて、大学では大学なりにやってほしいことはたくさんあるんですけども、やはり基本は私たち教員だと思うんです。何度も申しますように、私が立派な教師になりたいと思ったのは、やはり立派な先輩がいたからです。大学の先生の教えがあったからいい先生になろうなんて思わなかったんです。多分、今の初任者もそうではないかと思ったんです。

1年間初任者と一緒におりまして、初任者の教室へ入ってくださった先生から話をうかがい、「そういう悩みがあったのか」と改めて指導者として反省したんですけども、確かに初任者教員は教養的なものは本当に多くもっています。先ほどから出ておりますように、パソコンやら何やらは巧みに使いこなす、パッと教えてくれるわけです。そういうものは確かにすばらしいんですけども、人間を見る目ですとか、人の話を聞くときの基礎基本的なもの大学で教えてくだされば、学校はすばらしい教師がいっぱいいますので「引き受けます」と、堂々と胸を張って言えるのではないかと思います。

2、3年前に、学校が50周年というので小学校も中学校も随分垂れ幕があったのを見て、「戦後50年の間に脱脂粉乳がこうなったんだ」と私つくづく思ったんです。そんなことを思いながら、学校現場は「天気予報」に負けてはいけません。幾ら大学でいい授業をしてくださっても、学校現場が「天気予報」以下なんていうのはいけない。教師が100%信頼されなければだめですと。

先日も1年生の入学説明会がございまして、ちゃんと人数分机・イスを置いてあるんですけども、いわゆる今の若いお嬢さんたちがするような、そういうスタイルで床に座って聞いているお母さま方が多いわけです。こういう表現をしてはいけないんですけども、まるでトウモロコシ畑のように、みんな髪を赤くして。赤いのがいけないとは申さないんですけども、そんな形の父兄をも学校は指導していかなくてはならないんだと。それには子どもたちを立派に育てれば、そういう若いいろいろなお母さま方を、結果的には間接的に指導もできるのではないかと思います。私は、初任者を持っているからなお、教師として反省をしきりにしているわけなんです。生意気なことを申し上げて失礼だったんですけども。

池田（義） 信頼というのは、教育の原点でもございますし、そういう信頼関係が、先生と父兄とか、先生と生徒とかいろいろなところで少しずつ失われつつあるというのが、一番大きいのではないかと思います。

いかがですか、大学の姿勢がかなり問われているようですが。

荒尾 すごいショックを受けています。この4人の方が例えば一つの学校にいたとすれば、大変素晴らしい学校になるのではないかと思うんです。最初に、D先生がおっしゃったアンケート結果と、ご自分がなされた初任者の研修の後のアンケートで、それを先生ご自身がどう評価するとかという話題を出されました。大事な話題だと思います。大学は、今、学部のカリキュラムにしる、研修のカリキュラムの提供にしる、ご承知のように法人化で大学も曲がり角に来ていますので、この問題は教育学部がどういう形であれ再検討を要する問題です。

そういう状況の中で、カリキュラムの改正をしていく必要がどうしてもあると思うわけです。具体的にそれをどうするかということは、いささか見えにくいところがあります。大きく言えば、これだけ学校も変わり、社会も変わり、法体系も整備されていく中で、教育系の大学は何を教えるのかということに関して、やはり基本的には基礎的な学問をするんだという考え。それに対してもっと学生自身が社会を知り、あるいは地域に入り、子どもたちのことをよく知って、そういういわば教育に対する関係を自分自身がよく承知することが、むしろ今は大事なのではないか、という考え。この二つの考えがある。

もちろん両方とも必要だということだとは思いますが、どちらに比較的ウエートを置くのかということについて、最近の後で言った方の意見の勢いが強くなっているように思うんです。

そういう中で、実際にカリキュラムをつくろうとする話の中では、また教育は学問的な基礎基本に戻るという考えもあり、どこら辺に落ち着くのか非常に考えにくい、難しい状況にあると思うんです。教員養成課程を持っている国立大学の中で、モデルコアカリキュラムというものを想定して、もう少し今求められているカリキュラムについて、どの教員養成大学も求められる教員養成ができるように、ある核を持った形でカリキュラムを構築したらどうか、ということで研究をしているところなんです。そこでもいろいろ議論はあるようですが、どちらかということ今は学生が社会に出ていく、子どもをかなり知っている、そういうことをカリキュラムの中心に置きながら、そういうことのために教育学部のカリキュラムが、あるいは基礎科学的の力をつけていくことが必要だと、そういう流れになっているようです。だけど、そうではないんだという意見も非常に強いんです。むしろそれは逆だと。

それから今お話を伺いながら、大学は学生が、教職員、子ども、そして子供を守っている親、その親までも含めての教師に対する信頼であるとか、あるいは愛情だとか、そういうものを学ぶこと、あるいはそういう他の人との関係を伸ばせるようにしていくことも必要だと思います。また、やはり先生方もそうですけれども、みんな発想が違うわけですから、これでいいということはないわけで、自分の個性を生かした教育をやられていると思うんです。私たち大学は個性を生かした教師像というものを確立しなければいけないと思うんです。

池田（義） 荒尾先生にはまた最後のときにまとめていただきますので。

荒尾 A先生、最初2つお話したいとおっしゃっていましたが、最初のお話は何という言葉でまとめられましたか。

A 教員の意識の問題です。

池田（義） A先生のお話は、教員の意識の問題と研修の難しさということですよ。研

修の難しさが、日本ではどう、アメリカではどうのということではなく、先生というのはよく経験則で行動してしまうから、単に研修のための研修に終わってしまいがちである。もっと学問的なものを大切にするといったものを作ってもらいたいという、そういう趣旨かとうかがいましたが。

A 先ほど非常勤の話があり、臨時的に任用する場合の話もあったんですけども、私たちもそうなんです。実際、年度当初使うのはやはり若い教員なんです。どうしてかということ、子どもたちと一緒に伸びてくれるからです。だけど、いざ、担任が病休で抜けたというときにはやはり即戦力の先生を選ぶんです。それはその子どもたちに若い先生がぼんと入ってやられたら困るからなんです。でも、そういうふうに私たちが分けて見ること自体が既にもう問題なんではないかと思うわけです。でも、それが実態なんです。実際にはその間をつないでいるものがないわけです。だから、ここに、今言うカリキュラムの何かがあるのではないか。ここを教員養成カリキュラムでとらえるような形を考えられたらいいかなと思います。

ここだから言わせてもらいますが、よく女性の若い先生に言うんです。今、勉強をしなかったら、いつかは必ず産休に入らなければならない。入らなければならないという言い方はすごく問題がありますけれども、でも、やはりお産をする間、少なくとも6カ月近くは休まなければならない。今は男子と女子と一緒に育休がとれる時代だけれども、でも、やはりそこまで時代は進んでいない。埼玉県で今育休を取った男性の教員は2人しかいないんです。そうすると、やはりどうしてもそこで負担がかかる。そしたら、今一緒に学ぼうぜという言い方をしてしまうんです。

でも、それをちょっと置き換えて考えるとどういうことかということ、若いときは絶対に若さだけで子どもと分かち合える部分があるんです。だけど、年をとっていくうちに若さがなくなってくると、子どもと分かち合えるところがなくなるんです。では、それを何で補うかといったら指導力しかないんです。おもしろい授業、楽しい授業ができなかったら、もう若さのない人には子どもはついてこないです。そこが今いう30代の岐路なんだと思うんです。

池田（義） 先ほど、ピアノの話がちょっと出ていましたが、ここに音楽の先生がいらっしやいます。筒石先生、どうぞ。

筒石 埼玉の教員採用試験はバイエル48番とお聞きしました。今は全国的には課題曲は教材の弾き歌いが多いんです。そういう意味では埼玉県というは珍しい例かなと思います。僕もちょうど初等科音楽科教育法という小学校課程の講義を持っていますが、確かに技術というのは15回やそこらの時間で身につくのは難しいでしょう。とりあえずとっかかりしかできないので。あとはまさに生涯教育ですから自分で学んでいくしかないわけです。授業はスペース的にも時間的にも限られていますので、いかに基礎的なものをきちんと教えるかです。もちろん音楽はピアノがすべてではありませんので。いろいろな楽器もありますし、歌ももちろんありますので、教育も総合的に展開すると学生ももっと楽しめるようになると思います。

池田（義） 湯浅先生は国語の先生ですが、今のお話を聞いていて、実践力をつけるということについて何かご意見はありますか。

湯浅 自分自身の今のことを考えると、専門の研究を続けながら、それと平行して国語教育や日

本語教育の実践的な教材開発のような課題、そしてこうした教員養成のカリキュラムの問題のような問題について取り組んでいます。それらの中で一番無くしてはならないものは何かということ考えた時に、やはりまず専門的な知識を身につけるための研究だと思っています。ただこれから、日本語教育や国語教育の学生たちに、そうした専門的な知識をこれからどれくらい身に付けさせることができるのか、或いは身に付けさせる必要があるのか、ということを考えます。それは、教員として現場に対応できる実践的力と、専門的な知識教養とは、どれ程の関連があり得るのか、という問題です。実際のところ、大学で学んだ専門的な知識教養というのは、現場にあっては必ずしも即戦力にはならない時もあるように思います。しかしそれは、長い教員生活を続けるための力の源のようなものにはなるはずだと思っています。これからも、自分自身のことと、教員養成大学のあり方とを常に関連させて考えていかなければならないと思っています。

D 今、国語が出たんですが、私も大学は国語専攻だったんです。今、先生が国語教育を日本語教育とおっしゃったんですが、私もとてもそれは大事なことだなと思いながら、耳を傾けさせていただいたんです。まず、先ほどから出ているんですけども、今、言語、社会の言葉がとてもはっきりしない、そういう若い方々が多いです。大学ではどんな形で国語教育をなさっているのかということですが、聞くところによりますと、国語教育的にはわからないんですけども、パソコンで卒論を打ったりしています。手で書いて、原稿用紙の使い方を学ぶと言うことではないですけども、それでは、子どもたちの指導ができないんです。

初任者の1人が2年におりまして、たまに授業を観察に行くんです。パソコンは巧みにやるんですけども、「D先生、原稿用紙の使い方はどうでしたか」と聞くくらい、原稿用紙の使い方すらできない。先ほど大学でも「生きる力」をふまえたものやっていたらというのを申したんですけども、例えば、パソコンで「ヤマ」と打てば「山」と漢字で出てきてしまうので、しっかりしたハネるですとか、そういうところを大学の方では、国語教育としてどうやっているのでしょうか。

それから、今、20歳の若者たちが市長の話すら聞けないような状況もある。今も電車の中で携帯電話でメールか何かを打つのに、読書はしないのではないかなと思います。先ほどからも国語を教える時も、作家について研究しないで、教え方は巧みにできるのにということをおっしゃられていました。私なども遠い昔の大学時代の国文なんですけれども、太宰治などをやれば、わざわざ前橋とか、京都にまで行ったらと言われて、「まったく」と思いながら行ったりして。それを「何枚でまとめて出せ」とか、「私の本を貸すからこれをまとめて一晩で読んでこい」とか、結構そういうのがあった。むだと言えどもむだなのかもしれないが、それが役に立っていると思うんです。何か大学でも、どのような形ででも国語教育でなく、日本語教育をやらないと日本がだめになってしまうような気がして、とても心配しているんです。

湯浅 学生の作文指導は、やはりすごく必要だと思います。例えば作文については、ややもすると留学生の作文の方が日本人の作文よりも上手だったりすることがあります。私はまだ日本人の学生を教えて2年目が終わったところなんですけれども、作文指導や読む力、聞く力などの基本的な国語力を養成する必要性はとても感じています。

池田（義） 国語指導は、また後でまとめていただくときに含めてお願いいたします。

荒尾 これだけいろいろなことを要求されて。そうすると、やはり技術だとか、知識だとか、そ

ういうことはもう基本的なことも必要だけれども、やはり考え方であるとか、あるいはそれに関する方法であるとか、では、そういうことで何をどうすればいいとか、そういうところをそれぞれの授業の中で、結局はそれにつながることを教えるしかないんだと思うんです。教えるというか習得させるしかないのではないかなと思うんです。限られたカリキュラムの枠の中でやるわけですから……。

池田（義） 貴重な時間も大分迫ってきましたので、もう一言ずつ先生方からお願いしたいと思います。今までのお話をお聞きしての全体的な感想でも結構ですし、あえてここだけは言っておきたいことがありましたらお願いします。

A 今のハネとか何かというのは、もとを正せば小学校の教師がいけないんだと思うんです。小学校が漢字の教育をするときに、そこをきちんとしていれば済むことであって、それを大学に求めるのは難しいのではないかなと私は思うんです。作文の能力も同じだと思うんです。

私が大学に求めたいのは、教師というのは、私たちが学校に行って一番気がつくのは、自分が子どものレベルまでどこまで下がるのかということだと思うんです。要するにわかっていない人に、どこまで自分が近づけるかで、その指導力というのは決まると思っているんです。大学では知識や専門的な知識を学ぶところなんだけれども、教員養成の中では、必ず実践例とか、学校での実例と結びつけながら教育ができるということが、私は必要だと思うんです。つまり、「学生が現場の子どもたちはこうなんだ」とか、「今教える内容はこうなんだ」「だから、実際にはどこが必要なんだ」ということが頭の中で構築できるような授業ができたと思う。

もっと極端な話を言えば、私たちのようなものを授業で使っていただいたらいいと思うんです。それで、例えば理科の授業では、この実験をするときには子どもたちからこんな意見が出たよと。例えば、笑い話ですけども、プールの指導をしているときに、「じゃあ、みんな、プールの中の水をかき混ぜたいから回ってね」と言ったら、私は、子どもたちが歩いて回るのを想像したけれども、子どもたちはその場で回ったという話があるんです。本当に子どもたちというのはそういうものだから、そういうことができる大学の授業というのを、私は今後は求めたいと思います。

B 私も国語なので、漢字とか作文という話になると、いっぱい言いたいことがあるんです。うちの子どもは小学生で、その子を見ていると、やはり母親の個別指導なんです。学校の先生が課題を立てて、こういう順番で書きなさいというプリントをくれるんだけど、それを学校の中では消化し切れないので結局母親が見てあげている。書き上がったものを、「お父さん、これでどうなの」と来るから、「よく書けているね」と返してあげる。

学校の現場の中ではなかなかそういう時間がないので、習得させることができないまま中学校になって、高校でもあまりやらなくて、大学まで行ってレポートを書かせたら書けないという、そういう状況なのかなと思います。ただ、情報教育の方は割と技術交流とかがありまして、メールの打ち方にしても、あれも一つの若者の意思を伝える特殊なファクターでもあるから、必ずしもそれだけでないという人も多いし、手紙のかわりにあれで意思の疎通をしているというのもあるので、あれはあれで一つの今の子どもたちの特徴だと思っています。

先ほど出ていました、どれだけ子どもに近づくかという話も含めて、やはり冒頭申し上げましたように、大学生と現場ともしっかりと交流しないといけない。教育実習のとき、うちの校長は、必ず教育実習の前に指導案を書かせます。実習が始まってから書かせたのでは間に合わないの、それで私もかなり厳しくやるように言われているので、何度も突き返したりとか、事前にかかりの

日数をかけて書かせてやっております。それでやめてしまう子も毎年1人か2人出ますけれども、それくらいさせないと何もできません。本当に私たちが大学院でしゃべってもいいし、もっとそういう意味では交流をしないといけないのかなと思います。

C けさ久しぶりに門をくぐって大学に入りましたときに、ウン十年前に私も大学を卒業して社会に働きに出たときと、逆の気持ちというのを感じました。学校の中にいた大学生のときには自由で、好きなふうに。その中に戻ってきたような、タイムスリップしたようなものを感じました。これは何かかなと思って、座談会の中でも考えていたんですけども、学生にとって教員というのは魅力のある仕事なのかどうか、教員というのは魅力のある人なのかと、そういうことを考えていました。

初任者に、「教員というのは魅力があまりすか」ということを婉曲に聞きましたところ、職場の同僚は笑って黙っていました。それが答えかなと。私は来てみまして、逆に、大学の先生に大変魅力を感じました。学生のように自分を指導してくれた教官というのは、とても自由で、確かな知識を持っていて、しかも人間的に広がったので大好きだったんだと思ったんです。ちょっと自分は、目の前のことにとらわれ過ぎていると、そんなことを感じてしまいました。

それから、産休もオーケーではないかなと思いました。自分が10年専業主婦でいましたので、そのときにはやはり戻るとか戻らないとかいろいろ悩みましたけれども、子どもを育てるということは、必ずこの仕事に関しては生きて来るものだ。もちろん経験のみではないですけども、今、実際に保護者の気持ちを理解するという点に関して、とても役立っている気もするんです。これは学生にとってはまだ先の話でつかみにくいかなと思うんですけども。社会というのは、学校だけを教育の寄っかかりにしている時代になってきているのではないかなと思います。

義務教育ですから、行かせますし、もちろん授業も受けさせますけれども、親ももっと専門的な知識を持っていたりするので、それから学ぶべきものもたくさんあつたりします。私たちはそれを承知しながらやはり学校の中で教えて、子どもを育てることをしていかなないと、魅力のない集団になってしまつて大変だと思っています。

池田(義) 今、お子さんを実際に育てられた経験がありますし、それが生かされるといふ仕組みがあるとまた別かもしれないですね。やはりそういうよい面の教育というのはなかなか大切ですが難しいシステムですね。そういう知識が生けるといいですね。

D 今日はありがとうございました。私、先ほど先生がおっしゃっていましたように、もう随分大学から離れていますので、大学の先生たちは怖いイメージをもっていましたら全然そんなことはなく、本当にざっくばらんにお話できて楽しかったと思います。

そこで、私たち教員も何かのきっかけがあれば大学へ来て、現場はこうですと教える機会があったら楽しいだろうというのが一つ。それから、逆に大学の先生も小学校や中学校で、専門的なものはとてもすばらしいと思いますから、子どもにも教えていただけたらいいかなと思います。大学と大学とか、高校とかは比較的交流が多いみたいですけども、小学校にも、中学校にもいらっしゃっていただいて、勉強をさせていただきければと思ひながら、私たちもまた大学へ来て、学校はこうですか、父兄の扱いはこうですかというのを生の現場の交流ができればいいかな。そういうのをカリキュラムに組んでいただければ、それは夏休みの補習でも何でもいいのではないかなと思いました。カウンセリングみたいな部分も合わせていただければ、こちらの職員にとっても、いいと思います。

初任者が、「本当はこういう勉強をしてきたのかもしれないけれども、大学時代はそれが大事だと思わないので、テストのための、単位を取るためだけでやっていたので、本当は楽しかったのかもしれない」と言うんです。行けるものなら大学へもう一回行って勉強できたらというのを、先日も2人が言っていました。大学の方も教員になった先生方に1年間だけはフリーパスではないけれども、何単位ぐらまでは「自由にどうぞ」というのがあればいい。夏休みでも、それから夕方でも先生方が時間の取れる時、初任者研修で大学へもう一回戻って、これとこれをもう一回やり直すという場があったら楽しいだろうと思いついていました。そのように初任者も言っていました。

池田（義） 特に大学院ということではなくてもね。

D そういうのではなくて、本当に簡単な感じで、「空き時間がきょうはあるから、じゃあ、あの先生のを1時間聞けたらな」とか、「ちょっと授業を調達して勉強ができたらな」と思います。そういうのは私たち大学出たての者でなくてもやりたいですね。教えにこられたら、お役に立てれば現場の教師の講義なんかもいいかなと思いついていました。

池田（義） 実は、この座談会も、埼玉県先生方を対象にしようということでしたので、私どもの方から、どこか埼玉県の先生の学校とかどこかにお伺いしてしようかという案も最初は出たんです。ただ逆に迷惑をかけてしまうと困るということで、大変申しわけなかったんですけども、こちらに来ていただいたという事情になりました。そういう意味では、これからは総合交流で応援し合うということが大事かなと思います。

D あれば楽しいです。

池田（義） ちょっと最後になりますけれども、私の印象は、やはり2,000人の中の4人の先生方かなということです。すごくありがたいお話をたくさん伺って。確かに4人というのは少ないかもしれませんが、2,000人の中から宝石のような4人の先生というか、ご意見を伺ってとてもありがたいなと思いました。ぜひ、これからもこれを機会に、大学のこういう教育にもご協力いただいて、また機会がありましたらぜひお話を伺わせていただければと思います。

きょうは、本当に拙い司会で申しわけありませんでしたけれども、ありがとうございました。それでは、岩田先生の方にお返ししたいと思います。

〔討議のまとめ〕

総合司会 先生方、本当にありがとうございました。私ども東京学芸大学を初めとする教員養成系の大学で、これからカリキュラム内容を考えていますけれども、それにあたって本当に参考になるお話を伺えたというように思います。

最後になりますけれども、本学の教務・学生担当の副学長でカリキュラム運営の責任者であります荒尾先生の方から一言お願いいたします。

荒尾 本当に、きょうはお忙しいところ、遠いところをお越しくださいましてありがとうございました。アンケートでデータ分析してやるということが多いのですけれども、やはり直接お話を

何うと、その何十倍も何百倍も新しいことが聞けて、大変この機会が有意義であったと思います。いろいろな提案をいただいたと思いますし、また、ご示唆、あるいは逆のご提言もいただいたと思っております。今後も座談会、あるいはアンケートをぜひ生かして、学芸大学にとってももちろんですが、先ほど申し上げましたように、国立大学の教員養成系大学全体で今、教員養成をどうするか、あるいは現職の研修をどうするかということを考えていますので、そういう全体に。さらに言えば、私立大学の教員養成するときに、そういうところにぜひ役立つような情報発信をしていきたいということを目指していきたいと思います。

きょうはどうもありがとうございました。

総合司会 ありがとうございました。予定されていた時間もまいりましたので、これをもちまして座談会はお開きにさせていただきますと思います。

—了—